

令和 2 年 5 月 17 日現在

機関番号：12601

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2019

課題番号：18H05597・19K20805

研究課題名（和文）英語と多言語の共生：国際化社会における語学留学の意義と可能性を探る

研究課題名（英文）Co-existence of English and multilingualism: Exploring the new possibilities of study abroad in a globalized world

研究代表者

木村 大輔 (Kimura, Daisuke)

東京大学・教養学部・特任講師

研究者番号：00825523

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、非英語圏で英語を学ぶことを主な目的としている日本人留学生の動機づけ、対人関係の形成、および言語使用状況を包括的かつ縦断的に調査した。近年の語学留学の研究動向を踏まえ、学習者一人ひとりの経験に焦点をあてることにより、多様化の進む現代社会における語学留学の展望を考察した。複数の国際学会への参加、論文執筆・投稿を行い広く国内外に研究成果を報告した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

国際的な知的・文化的交流が盛んに行われ、世界人口の4人に1人は英語を何らかの形で使用しているといわれる現在、英語のリンガ・フランカとしての役割は他の言語とは一線を画すものとなったといえる。これに呼応し、近年の応用言語学研究では多様な言語文化への適応能力の重要性を軸にした教室活動や教員養成への示唆の提示が盛んに行われている。しかし、非英語圏での英語学習を目的とした留学に関する研究は限定的である。そのため、本研究では英語と多言語が共生し、様々な文化が交わる環境で英語を学ぶことの利点や問題点を明らかにし、国際化時代の新しい語学留学のあり方を模索することを目指した。

研究成果の概要（英文）：This longitudinal research investigated motivation, social networks, and language use of Japanese exchange students in Thailand whose primary objective for study abroad was to improve their English skills. Considering the recent trends in study abroad research, it focused on the particularities of individual learners, with the goal of contributing our understanding of language learning in the ever-diversifying world. The findings of this research were disseminated widely at academic conferences and in journal articles.

研究分野：社会言語学、応用言語学

キーワード：共通語としての英語 留学 アイデンティティ 対人関係の形成 語用論 多言語

1. 研究開始当初の背景

本研究はリング・フランカとしての英語(ELF)と語学留学の二つの研究領域を体系的に結びつけ、両分野の相互的發展を目指す試みとして計画された。申請者は、関連する研究を複数の国際学会で発表しており、本事業はそれらの研究をより深化させるものである。以下に、特記すべき学術的背景を説明する。

国際的な知的・文化的交流が盛んに行われ、世界人口の4人に1人は英語を何らかの形で使用しているといわれる現在、英語のリング・フランカとしての役割は他の言語とは一線を画すものとなったといえる。これに呼応し、ELFの研究者達は、英語第二言語話者の文法や発音における特異性を「欠陥」としてではなく、単に「違い」とであると捉え、それ自体が意思疎通に悪影響を及ぼすとは限らないということを一貫して示してきた。これらの研究結果に基づき、近年では多様な言語文化への適応能力の重要性を軸にした教室活動や教員養成への示唆の提示が盛んに行われている。しかし、非英語圏での英語学習を目的とした留学に関する研究は極めて限定的である。

外国語教育において、語学留学の研究は1960年台ごろから盛んに行われるようになり、永くその中核をなすものとして捉えられてきた。語学留学が外国語学習に一定の好ましい影響を与えることは、多数の数量的研究によって示されており、特に語彙と語用論の領域に対する効果が顕著であるといわれている。しかしながら、個々の研究結果には大きなばらつきがあることもわかっている。この一因は、大多数の研究は事前・事後調査の形で行われており、学習者一人ひとりが留学先で誰と関わりを持ち、何を思い、何をしているのかがブラックボックスとなっていることである。

そのため、近年の語学留学の研究は過度の一般化を目的としない事例研究が増えてきている。これらの研究の特徴は、学習者一人ひとりのアイデンティティ、対人関係の形成、学習履歴、将来への展望などを、ナラティブ分析などの手法を用いて包括的に分析・考察する点である。こういった研究を積み重ねることにより、事前・事後的な研究ではわからなかったブラックボックスの部分を解き明かす一助とすることが期待されている。

申請者の先行研究から、東南アジアの大学に在籍している日本人学生の中には、留学を通して「英語プラス多言語を使用する能力」の向上を目指している者が少なからず存在していることがわかってきた。これは、英語の国際・多言語社会における位置づけに対する認識が日本人学習者の一部に浸透し、ネイティブスピーカーの規範に囚われすぎない学習態度が拡がりつつあることの現れであると考えられる。国境を超えた多方向の人の流れが活発化した社会状況に鑑みれば、学習者のこのような英語に対する態度の変化は歓迎すべき風潮である。彼らが何を考え、望み、行動しているのかを調査することは、今後の日本における英語教育の発展の一助となる。また、欧米の政治的緊張が高まり、排他的な移民政策が進む現代において、英語圏以外の選択肢を探求することは、より多くの学生に意義深い留学の機会を提供することにつながる。しかしながら、非英語圏での英語語学留学は未だ一般的であるとは言えない。事例研究を増やし、日本人学習者の留学先での経験を把握し共有することは、将来の留学参加者と教育者がよりよい選択をするために不可欠であるため、本研究は想起された。

2. 研究の目的

国際化が進み第二言語話者同士の英語の使用が一般的となった現代において、非英語圏での英語語学留学の可能性を探ることの意義は、上記の背景で示したとおりである。これを踏まえ、本研究では以下の「問い」に対する答えを示すことを目的として執り行われた：

- 1) 国境を超えた人の流れが活発化し、第二言語話者同士の英語の使用が主流となった現代社会において、今日の英語学習者は何を基準にして留学先を決めているのか。
- 2) 一人ひとりの学習者は留学先で何をし、誰と関わりを持ち、どのように英語とその他の言語を使い、学んでいるのか。
- 3) 彼らの経験は、多様化の進む現代社会における語学留学および言語教育に対してどのような意味を持つのか。

非英語圏の中でも、特にタイに留学している日本人学生を対象とした。タイをはじめとするASEAN諸国では、国と国との経済や教育分野での連携が盛んに行われており、そのなかで英語を共通語として使用することが多い。また、様々な国からの人とモノの流入が顕著であり、日本とも経済、文化、および教育の分野での交流が盛んである。本研究の狙いは、こういった英語と多言語が共生し、様々な文化が交わる環境で英語を学ぶことの利点や問題点を明らかにし、国際化時代の新しい語学留学のあり方を模索することであった。

また、国際学会への参加、論文執筆・投稿を行い広く国内外に研究成果を報告すること、及び非英語圏で英語を学ぶ日本人学生と彼らを支援する学校スタッフへ教育的示唆を提示することも目指した。

3. 研究の方法

様々なアイデンティや学習歴・将来への展望を持った一人ひとりの学習者が、留学先で誰と関わりを持ち、何を思い、何をしているのかについて調査するため、本研究ではタイでフィールドワークを行い、日本人学生からデータを収集した。具体的なデータ収集方法は以下の通りである：

- 1) 日々の言語使用・学習に関する定期的な対面またはインターネットを介したインタビュー（各30分程度、録音）。頻度は2週間に一度、被験者の都合に合わせて調整した。
- 2) 実際の言語使用場面のビデオ撮影
- 3) 上記に関連するノートや写真などの資料提供

これらのデータはナラティブ分析と会話分析の2つの手法を併用して分析した。また、個人情報の管理など、研究倫理には細心の注意を計った。被験者には研究目的やデータの使用方法などについて十分に説明した上で参加を求めた。インタビューから得たデータの分析は、氏名などの個人情報を完全に匿名化した後に分析を行った。ビデオ撮影をから得たデータに関しては、被験者全員の意思をたずね、必要に応じてモザイク加工処理などを行った。

4. 研究成果

本研究では、「文献調査」、「国際学会での発表・意見交換」、「フィールドワークでのデータ収集」、「論文執筆・寄稿」の4点に注力し、当初計画した通りの成果を上げることができた。

文献調査では、類似する先行研究が少ないため、従来の語学留学研究の他に、質的調査の方法論についても広く学び、フィールドワークと研究執筆に備えた。先行研究に基づき、学習者の対人関係の形成、および言語使用状況を定期的に調べるための質問調査紙を Language Contact Profile (Freed, 2004) を基に作成し、インタビューや録画の方法も先行研究に即した内容になるように努めた。

2019年の夏季休暇中実施したフィールドワークでは、博士論文研究の際に培った、タイ国内の応用言語学者のネットワーク(現職教員や博士課程在籍者を含む)を使い、英語学習を目的としてタイに来ている日本人学習者を探し参加依頼を行い、上記の質問調査紙と録画機材を用いてデータ収集を行った。フィールドワーク終了後もオンラインで隔週インタビューとアンケートを実施し、留学中の心境や対人関係の変化についても調査した。また、データ収集と並行して、収集済みのデータの分析もすすめることで、個人のケースに即した質問をすることに留意した。これらを通じて、留学中の言語使用と対人関係の形成は、個人のアイデンティや志向、及び文化資本と密接に関わっていることが明らかになった。留学研究では、学習者は渡航先の国の言語・文化を学ぶことが前提とされているが、本研究は「言語使用と学習成果は渡航先よりも渡航先での人間関係に強く影響を受ける」ことを示唆している。この結果は、国際的な人の移動の加速と、それに伴う多様化の進行に鑑みれば妥当であり、留学研究への重要な示唆を含んでいる。そのため、今後のさらなる研究発展が期待される。

事業期間中は学会に精力的に参加し意見交換とネットワーク形成に努めた。特に、アメリカ応用言語学会(2019年3月、アトランタ)とASIA TEFL(2019年7月、バンコク)に参加した際には、研究の専門家が多数参加しており、彼らと研究について話す中で、自身の研究の独自性とタイムリーさを改めて確認する事ができ、助言も受けることができた。数人の研究者と共同研究の話も持ち上がり、今後の研究の足がかりを築くことができた。別の研究者(語用論研究の第一人者)から論文寄稿依頼を受けた。また、研究手法に関して知見を深めるため、立命館大学で開催されたナラティブ研究シンポジウム(2018年11月)と韓国梨花女子大学で開催された会話分析シンポジウム(2019年、5月)にも参加した。

また、論文執筆・寄稿も積極的に行った。事業前半においては、博士論文の一部として収集してあった非英語圏での留学に関するデータをもとにした執筆を行い、Journal of Pragmaticsと(査読中)と Study Abroad Research in Second Language Acquisition and International Education(掲載済み)、JACET ELF SIG Journal(掲載済み)へ寄稿した。これらの論文は、本科研費助成事業に直接関係のある内容であるため、私の知見を深め研究者としての認知度を高める上で非常に有益であった。その甲斐もあり、関係分野での国際論文の査読依頼も数件受けた。また、前述の通り語用論研究の第一人者から寄稿依頼を受け、本事業で収集したデータをもとにした論文を執筆し、2020年4月に The Modern Language Journal へ提出した。今後も執筆活動を通して、研究成果の発信に努めたい。

最後に、類似研究が殆ど存在していなかったため本研究課題は比較的小規模の質的調査となったが、留学研究の最新の動向に鑑みれば、計画は妥当であり、先行文献への重要な示唆を含む成果を上げることができた。今後は、更に事例研究を進めるとともに、多くの学生に共通するテーマを精査・抽出し、より大規模な数量的研究につなげることも目指したい。また、研究にとどまらず、東南アジアで英語を学ぶ日本人学生と彼らを支援する学校スタッフへ教育的示唆を提示することも積極的に行っていく。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Kimura Daisuke	4. 巻 4
2. 論文標題 “ Seriously, I came here to study English ”	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Study Abroad Research in Second Language Acquisition and International Education	6. 最初と最後の頁 70 ~ 95
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.1075/sar.17020.kim	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kimura Daisuke	4. 巻 3
2. 論文標題 Towards cross-fertilization of English as a lingua franca and study abroad.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 JACET ELF SIG Journal	6. 最初と最後の頁 3 ~ 24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 5件）

1. 発表者名 Kimura Daisuke
2. 発表標題 English as a lingua franca in a study abroad context: Multiple case studies of Japanese exchange students in Thailand
3. 学会等名 ASIA TEFL (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kimura Daisuke
2. 発表標題 Life-long and life-wide learning of English-knowing multilinguals: A conversation analytic study of a peer tutoring session
3. 学会等名 Conversation Analysis Network Asia (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kimura Daisuke
2. 発表標題 Re-specifying the notion of cooperativeness in ELF research: Alignment and affiliation.
3. 学会等名 American Association for Applied Linguistics (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kimura Daisuke
2. 発表標題 English as a lingua franca and additional language learning: An analysis of Thai tutoring session
3. 学会等名 International Conference of English as a Lingua Franca (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kimura Daisuke
2. 発表標題 ELF in study abroad: Multiple case studies of Japanese exchange students in Thailand
3. 学会等名 International Conference of English as a Lingua Franca (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

Invited Interviewee for Passion for English Show, directed by Dr. Mintra Puripunyanich (Chulalongkorn University Language Institute), August 2019.
Invited talk, titled "Towards cross-fertilization of ELF and study abroad, Tamagawa University Faculty Development Seminar, November 2019.

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----